

がま研 かわら版



第1号
平成2年6月4日
発行所 岩波山がま研
〒100-0001 東京都千代田区上野

ボランテニアとは 林 正一

「冬草も見えぬ雪野の白鷺も己が姿に身を隠しけり」と、鎌倉時代の名僧道元が教を詠んでおります。

要するに、冬草も見えぬくらい、辺り一面真白に積った雪の原野に、一羽の白鷺が立っている姿が眼に浮かんでくると思います。しかし、誰にも美しい白鷺の姿を雪の中から見出すことは出来ません。でも、白鷺は美しい姿を自分自身のために、いつも保って生きています。それを、それを見て、ボランテニアとは何ぞやと考えるみました。ボランテニアとは、何人かが集まって行うものと考えている方が多い様ですが、決してそうではありません。一人でもボランテニア活動は出来るのです。しかし私にはボランテニアなどとも出来ないし、向いてないという方があるかもしれませんが、皆さんが小学校へ通っていた頃を思い浮かべて下さい。授業中、黒板消しが先生の足に落ちそうになっていました。あなたは、どの様に感じたでしょうか。恐らく、普通の人ならば、先生の足に当たったら痛いだろうな、スポンが汚れるだろうなと思っただけに違いありません。すぐに行って直してあげたいと思っただけは、ボランテニアの精神があるから自然に心が動くのです。それがボランテニアの始まりなのです。目立つところをするものばかりがボランテニアではありません。勇気を出して堂々とやってみて下さい。たとえは、乗り物等でお年寄りに席を譲ったり、道端の空き缶やゴミを拾ったりするのも立派なボランテニアなのです。ボランテニアとは、人のためにするのはなく、自分自身のためにするのですから……。また、友人がボランテニア活動をしていたら、「ありがどう、御苦労様」と声。

かけて下さい。そして、一緒に手伝って下さい。



「がま研」の発足にあたり 中山良夫

最初の予想どおり、会員五十名程度となり好スタートを切ることができました。この間発起人の林先生そして宇野さんには多大のおほおわりいただき感謝しております。ふり返って見ますと、私、平成九年小町の館裏一回目の受講生として勉強させていただきました。以来、幾一回目の受講生だけで林先生のご指導により毎年二回位勉強会をやらせていただきました。おかげさまで「忘れては覚え」の線返しだったので、三年もやるとけっこうそれなりに身につけてくるものと思うようになりました。ありがたいものです。今回、小町の館全受講生を対象として研究会を発足され、新たに明確な目標をもって出発することになり、心から喜んでおります。みな様とご一緒に、是非楽しい会を作っていきたいと思っております。私、百姓のジーンですが、時間だけは自由ですので使ってみて下さい。ご指導よろしくお願ひ致します。



お知らせ

その一、さる六月三日の役員会におきまして、原政男氏を顧問に選任、林会長よりご本人に連絡され、こころよくご理解をいただきましたので、会員各位にお知らせ致します。今後、原政男顧問には「がま研」発展のため、卓越された技能識見を大いに發揮

き、よろしくご指導ご鞭撻たまわりますようお願い上げる次第です。

その二、みなさまご期待の「がま研」会員証が出来ました。この制作者は、当会員でもあるデザイナー宇野昭氏のデザインによるものです。「会員証」の図案説明を全体をみどり地（自然環境に恵まれた筑波山及びその周辺を表す）で、右側上部に名峰筑波山を描き、左側上部「会員証」及び中央部「筑波山がまの油売り口上研究会」を勅序流文字で白抜きし、左側下部にご存知四六のがまを配しました。制作にあたり、当がま研が益々発展されることを心祈念しながら、制作に熱中されたのか……

なお、宇野昭氏のデザインで主な作品は、茨城県体育協会シンボルマーク入選・土浦市ソフトボール協会シンボルマーク入選・陸上自衛隊修練会連合シンボルマーク入選・陸上自衛隊霞ヶ浦駐屯地シンボルマーク入選・エリート情報社シンボルマーク入選・霞ヶ浦浄化スチール等その他多くの作品があります。会員各位へお願ひ！「会員証」は、かわら版と同封しお送りいたしますのでお受けとり下さい。今後「会員証」は、会合等の際には必ず携帯し、会場にて装着下さるようお願いいたします。なお「会員証」を入れるケース（ストラップ付き）は、当会で一括購入いたしましたので、次回会合時に大世話人（中山）へ、ケース代三百円をお支払い下さい。



「がま研」の設立を祝して
おもしろきことも無き世をおもしろく

これは、高杉晋作の時世の句として記憶しておりますが、上の句として頂き、私なりに作句いたしました。

おもしろや遊び心の六十路坂

集うがま研いと楽し

平成十二年四月二日永井英助生誕の地、また、小野の小町ゆかりの地であります小町の里にて、筑波山がまの油売り口上研究会の設立総会が開催されました。折しも日本三大日枝神社の流鏑馬まつり、この佳き日にがま研の設立総会、五十名の出席者の賛同を得て「がま研」が発足されたことは、誠に先先の良いこととおよろこびとお祝い申し上げます。特に奥井登美子先生の「がまの油の薬効について」の記念講演を拝聴させて頂き、大いに勉強になりました。奥井先生には、今後共がま研発展の根元となり、色々な面でご教示下さる様お願い致したく思っております。本年度事業計画にのっとり、がまの油売り口上の研修に、つとめ会員相互の親睦を計り、会員個人の勉強研修の場になって行ければ良いと願っております。遊び心を交えて楽しい「がま研」が育つて行く様祈念致します。

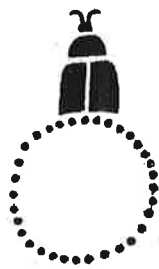


金のたまご

宮川 正 美

若い時から下手の横好きと言うか、何でも興味を持ちたらずく飛びつき、始めるのは良いが、どれもこれも長続きしない、そして物にならぬ。むかし紅灯の巷でよく言われた「にわとり」のよう

なのである。実は「がま口上」もそれら数々の中の一つであった。今回「がま研」発足に当たり、一念発起、二十五年振りに再挑戦する事にしたが、三つ子の魂——なんとかて今度も自信はない。その中でたった一つだけ四十五年間、飽きる事もなく続いているものがある。それは「囲碁」である。囲碁はよく人生や宇宙に例えられるように、奥行き幅ともに無限に広がる知的ゲームである。「にわとり」にしては一つだけ、金の卵を生み育てることができたと言っている。今は碁会所に行ったり対戦相手を探したりする必要は全くなく、自宅に居ながらパソコンで、全国の同好の士と対戦を楽しめる事ができる。対戦に当たり私か何時も納得させられる事が「囲碁十訣」の中にある。それは「不得貧勝」と言う言葉である。これは「むさぼれば勝ちを得ず」と読む。要するに「勝ちたい」(儲けたい)「むっと儲けたい」人間の欲望には切りがない、そこに落とし穴がまわっている。「そのような勝負、人生には(勝利、成功)はないぞ」と言う戒めの一言である。私はいつもこれで負けている。



私どがまの油売り口上

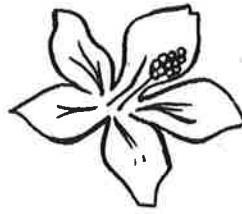
泉 修 平

今から遡ること二十四年前の昭和五十一年の秋、新聞を見てみると、ふと目に止まったのが土浦社教センターでの「がまの油売り口上」受講生募集の記事でした。かねてから演説の余興に何か一つ、自分に合った芸を身につけたいと思っていた私は「がまの油売り口上」の字に引き付けられ、

うちよすることなく、申し込みを致しました。それが林先生との出会いでもありました。同じ受講生の中に公明党の二見神明氏もいられていました。秋の夜長を三ヶ月間程、勉強させて頂き、受講日が来るのが楽しみで、待ち遠しくて全日教、出席致しました。毎日行く毎に、自分に持つていなか

った新しい芸を吸収して帰る、楽しくて仕方がありませんでした。夢中で覚え、全てをマスターしたつもりが、皆の前で披露する時には一度リズムが狂うと次の句が出てこなくて、途中で止めてしまった事も度々ありました。それから二年後の昭和五十三年、筑波山がま祭りでの「がまの油売り口上全国大会」では殊勲賞を受賞、翌年には敢闘賞を受賞致しました。それから仕事上の都合もあり、長らく「がま口上」は休眠状態で二十年近くか過ぎてしまいました。それが平成十年、單身赴任で姫路市に在住の時、たまたま茨城に帰省していた時の事でした。新聞を見て「がまの油売り口上」受講生募集の記事を目にして、忘れかけていた「がまの油売り口上」を再度受講することに、体の奥底から血が騒ぎ出しました。早速、申し込みを致しました所が、これがなんと林先生との二度目の再会となりました。二週間に一度の受講日には姫路から七時間かけて帰って来て全日教、受講致しました。二十四年前に受講した時の、ガムシマラに覚えることに、一生懸命だった頃の自分から、聞いている人を如何に引き付ける為には、どうしたら良いかを研究する自分に変わってしまいました。「がま口上」には三つのタイプがあると云われますが、一つは「売るのがま口上」、二つ目は「見せるのがま口上」、三つ目は「聞かせるのがま口上」、三つのタイプがバランス良く合

私は取り分け、「売る為のがま口上」、「聞かせ
る為のがま口上」が好きです。仕事から（商品開
発に従事）、全国を巡って商品説明会（五十〜五
百人）を行っておりますが、会場の雰囲気合え
ば余興に「がま口上」を披露して帰って来ます。
又、商品展示即売会では他の人の二〜四倍の商品
を売って帰って来ますが、この根底には「がまの
油売り口上」を勉強した知識が後押ししています。
商品を売る為には、商品知識も必要ですが、それ
以上に、「如何にして相手の心をつかむ」かに、
かかっている様に思えます。



名刺代わりの口上

田中秀朗

縁もゆかりもない、だから当然友人も知人もいな
い旧勝田市に昭和四十八年、たまたま具公社の分
譲住宅が身たつて横浜から越して来た私が、今で
は街へ出ると、必ず誰か知った人と行き会おうよう
な広いつながりを持つるようになった、そのきつ
かけは「がまの油売り口上」でした。勝田へ来る
までの私は人とのつながりを持つのはただ一語に
酒を飲むだけでしたので、何か歌か踊を習いたい
と思っていました。そして、茨城へ来てから、確
かこの茨城には、あの有名な「筑波名物がまの油
売り口上」というのがあって、誰か先生が指導さ
れている筈だ、あれを是非習いたいと思っていま
した。そうしているうち、或る日、新聞に上浦の
社教センターで講習会が始まるという記事が出て
「これだア」と、早速受講を申込んだが、折々

「なりました。それは私がこの社教センターの政
区域に住居も勤務地もない、いわゆる、この地
は全く関係のない人間であったからです。それで
も無理に入れてもらって無欠席で受講しましたが、
一年目の講習会だけでは人前で演じるほどの自信
が持てませんでした。二年目も受講させていただ
いてやつと出来るようになりまし。それから
何か会合、特に初顔合わせのあとの懇親会では、
他の人たちが歌ったり踊ったりした後、頃合いを
見計らって「それでは私が一つがまの油売り口上
を・・・」という具合でやりますと、強烈にアピ
ール出来て完全に顔と名前を覚えられました。ま
た昭和六十三年の敬老の日には、林先生から垂れ
幕をお借りして地元小学校体育館で披露しまし
たところ出席者から「珍しいものを見せてもらった
長生きしてよかったですよ」と大変よろこばれました。
私はこのようにしてこのインパクトの強い「がま
の油売り口上」を名刺代わりにしてきました。そ
の結果多くの友人知人を得ることができたのです。



文芸コーナー

堀健夫選

がまは 慕跳ねる度に子等の輪崩れけり
連れ犬の怖ぶおづ喚げり慕



川柳

がま仙人

思いやり心とこころ結ぶ糸
名騎手も駄馬に騎乗し攻めあぐむ
顔いっぱいチームカラーのサポーター
母の背に苦勞かけたと手を合わせ
捨てきれず整理しきれずゴミの山



編集後記

うつとうしい梅雨の本番となりました。このたび
本年度の事業計画どおり、会報「がま研かわら版」
第一号を発行するにあたりましては、会員の皆様か
ら熱心なご支援とご協力により、多数のご投稿を
頂きました誠にありがとうございます。ここに
紙上をもちまして厚く御礼申し上げます。始めて
の「かわら版」編集に、いささか戸惑いながらも
何事も生きた経験と思ひ、未熟ながらも一生懸命
に頑張り続け、いい汗を流しながらやつとの思い
で、第一号を発行することが出来ました。次号は
平成十五年二月下旬に発行予定でありますので、
ご多用中誠に恐れ入りますが、来年一月末頃まで
に、今回に倍しまして、会員の皆様方よりご投稿
たまわりますよう切にお願ひ申し上げる次第です。
このさきやかな「がま研かわら版」が、会員皆様
方のひとときのお友として過ぎして頂ければ幸いで
あります。
天候不順の折、ご自愛のほど願ひ申し上げます。

編集 子